

TLP ドイツ語ハンブルク研修レポート ドイツの「怪しい英語」事情

鈴木隆三

英語がリング・フランカとして世界を席卷している現代において、非英語圏の国々は絶えず種々の文字情報の英語化を求められる。しかしそれには無論限界があり、時に支離滅裂な「英語」もどきが生成されてしまう。これを「怪しい日本語」にちなみ「怪しい英語」と呼ぼう。日本人である我々にとって「怪しい英語」は極めて身近なものである。実際*Don't smokingなどは嫌というほど目にさせられる。では同じく非英語圏のドイツではどうか。結論から言えば、その正確さは実に驚くべきものである。

公共交通機関は、ことさら英語表記が必要とされるだけにその分「怪しい英語」も生みやすいが、ドイツは見事にそれを回避している。例えば地下鉄のドアに貼られていた、„Türen beim Öffnen nicht berühren“, „Nicht an die Tür lehnen!“という掲示にはそれぞれ“Please keep hands away from door“, “Do not lean against door!“という訳が付されていた。ここには感嘆すべき点が二つある。一つは door と冠詞の関係である。規範文法においては、可算名詞単数形には何らかの冠詞を付すことが必要であるため、素朴な発想に基づけば the door や doors などとするのが正しいように思われるが、実は“notice-style“ English では冠詞の省略が認められており、この表示はその事実を踏まえて書かれていると思われる。実際ニューヨーク地下鉄には“Do not lean on door“という表示がある。第二に、keep にのみ please を使用している点である。そもそもなぜ please に注目するかといえば、命令文に please をむやみにつけることは意図せぬ「副作用」を引き起こしかねないからである。私の友人の一人はトイレの個室で“Please push button to flush“の push が消えかかって“Please button to flush“となっているのを見て「これでは外国人はトイレを流すためにボタンを喜ばせる羽目になってしまうではないか」と言っていた。現実にもそうした誤解が発生することはもちろんありえないが、please の「罪過」であることには間違いない。それにもかかわらず please が使われているのは、ロンドン地下鉄の“Please keep your belongings and clothing clear of the doors“が参照されたからかもしれない。これらの文が英語非ネイティブによるものかどうかはわからないが、少なくともかなりの正確さを有していることは確かである。

ノイエンガンメ強制収容所の英語による展示説明も見どころ満載であった。特に感銘を受けたのは次の一文である。

Many people, **among them Jews who had managed to escape the extermination of the Jewish population in Serbia**, were arrested in Yugoslavia for political reasons or during resettlement measures and other campaigns against the population.

among 以下は所謂「独立分詞構文」であり、その中では among them (C') [being (V')] Jews...(S') という倒置すら発生している。かなりの程度英語に熟達していない限り到底思いつくことのかなわない構文であろう。with を伴わない独立分詞構文は文語的なので、文脈にも適している。Jew と Jewish の両者を使用しているのもまた注目に値する。確かに Jew はときに侮辱語としても使われるが、Jewish が近距離で繰り返されるのを避けたかったのだろう。英語は同一表現の繰り返しを病的なまでに嫌うので、その点で Jew はむしろより適切といえるかもしれない。こうなるともはや英語ネイティブによる文章だとみなすべきであるように思えるが、そうだとすも充実したネイティブチェックがなされていることを評価すべきである。

人気店のメニューも当然「怪しい英語」の危険にさらされるが、以上二つの場合と違って必ずしも十分なネイティブチェックの機会を得ることはできない。リュネブルクの Krone は日本の観光ガイドブックに掲載されるほどの有名店だけあって英語メニューが用意されていたが、いくつか「おや」と思う部分が見つかった。

Deftige Grützwurst mit Zwiebeln, Gewürzgurke und Bratkartoffeln

“Grützwurst“ black pudding made of pork, onions and pearl barely served with fried potatoes and gherkin

まず注目すべきは black pudding という表現である。これは「豚肉の黒ソーセージ」を意味するが、肉の腸詰めを pudding と呼ぶのはイギリス英語式であり、より一般的には black sausage という。gherkin もイギリス英語で—gherkin は可算名詞なので無冠詞単数形で使うのは避けて gherkins としたほうがよいという指摘はさておき—pickle のほうがなじみ深いだろう。ドイツ人は会話においてもイギリス式発音を用いることが多いので、それが文章にも表れているということか。次に barely について、このままだと「豚肉とたまねぎと真珠でできた黒ソーセージ、フライドポテトとピクルスがかろうじてつきます」という意味になってしまう。もちろんこれは pearl barley 「精白玉麦」のミススペルであり、実際は十分な量のフ

ライドポテトとピクルスが真珠なしで提供される。とはいえ barely と barley はスペルが酷似しているためネイティブもそれに気づかないかもしれない。タイポグリセミアを説明した有名な例文”Aoccdrnig to a rscheearch at Cmabrigde Uinervtisy, it deosn't mtttaer in waht oredr the ltteers in a wrod are, the olny iprmoentn tihng is taht the frist and lsat ltteer be at the rghit pclae. The rset can be a toatl mses and you can sitll raed it wouthit porbelm. Tihs is bcuseae the huamn mnid deos not raed ervey lteter by istlef, but the wrod as a wlohe.”が示すように、barley が barely と書かれていても解釈の上では何ら問題ないと考えられる。

さて、以上の考察から、ドイツではかなり高いレベルの正確性をもつ英語が公共・民間両場面で—おそらくときにネイティブの助力を得ながら—提供されていることがわかる。その一方で一部のバスや電車に英語による行先表示や案内放送が存在しないことは注目値する。日本語・英語（・中国語・韓国朝鮮語）の案内を提供している日本のそれとは対照的だ。日本にはドイツほど外国人はいないし、英語教育の水準も及んでいない。にもかかわらず、多くの日本人は至る所に「怪しい英語」を掲げて、もしくはそれを眺めて、「グローバル化に対応している」と満足している。とにかくそこら中にラテン文字を並べて表面的な体裁を整えようとしてもかえって醜態をさらすだけであることは明らかだ。ドイツのように「必要などころに十分な質の」英語を提供する方針への転換も、もっと検討されてもよいのではないだろうか。これから日本が英語とどのように向き合うべきかのヒントは、ドイツにあるのかもしれない。

(2022 年 11 月 17 日受理、2022 年 11 月 25 日公開)